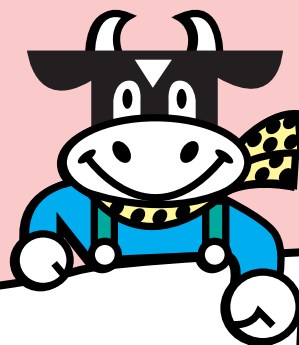




## ワンポイント・アドバイス



### 子牛の第四胃拡張（鼓脹）症

子牛の急患で呼ばれる病気の中に第四胃拡張症があります。さつきまで元気にミルクを飲んでいた子牛が、気づけばお腹を痛がり悶絶している・・・このような経験はないでしょうか？

第四胃拡張症は、哺乳期間中の生後5〜11週齢の子牛で多く、哺乳後数時間以内に突発的に発生します。子牛が飲んだミルクは、第一〜三胃にはほとんど入らずに、直接第四胃へ流れ込みます。第四胃内に入ったミルクは第四胃から分泌される酵素の作用を受けて発酵し、カードという塊を作ります。このカードが第四胃内に長時間貯留して徐々に消化吸収が進んでいくことで、子牛は体内に栄養素を取り込むことが可能となります。この発酵過程がうまくいかないと、ミルクは液状のままガスが多量に発生し、その結果第四胃が水風船のような状態になります。この状態が第四胃拡張です。

主な臨床症状としては、後肢で腹部を蹴り上げたり、寝起きを頻繁に繰り返す疝痛症状、腹部膨満、腹部の拍水（ジャブジャブ）音があります。当然のことながら、口に指を持っていても吸う力は

無く、眼球も落ちてきます。便は泥状かあるいは排出されなくなります。腹部を右側から押すとガスが貯まっている感触があります。また、腹底に手を当て揺ると液状の内容物が溜まり大きくなった四胃を把握することができません。

発症した子牛に対しては、手術が適用されます。子牛を仰向けに寝かせ、開腹します。大きく膨らんだ第四胃内に溜まったガスと、異常発酵してカードになれなかった液状内容を除去します。併せて、脱水が進んでいる子牛には補液も行います。手術後の経過は良好なことが多く、翌日には起立してミルクを欲しがることが見られます。

発症の予防には、給与するミルクの温度と時間を一定にし、一回当たりの給与量を多くしすぎないことです。

第四胃拡張症を疑う子牛を発見した時には、ガスで張ったお腹を見ると、外から刃物で穴を開けたら良さそうな気がしますし、穴を開ければ一時的にガスが抜け腹部の張りはなくなります。しかし、切れた第四胃の中から内容が流れ出て腹腔内が汚染され、腹膜炎になり手の施し

ようがなくなってしまうます。ですから、一時しのぎのために第四胃に穴を開けるのはぐっとこらえ、獣医師を呼んでください。



左上：大きく張った腹部  
右上：拡張した四胃  
右下：除去した四胃内容